

性被害の実態と中学生の性に関する悩みや不安

本田 優子・久野由賀*・猪俣 瞳**

Research on Sex Damage of University Student, and on a Trouble and Uneasiness about a Sex of Junior High School Student.

Yuuko HONDA, Yuka HISANO*, Hitomi INOMATA**

(Received by October 1, 2009)

We investigated sex damage to the university student, and conducted question paper investigation about the uneasiness and the trouble about a sex for the second grader of a junior high school, and analyzed the result. The percentage of a college student's sex damage experience is 34.6%, and there was no difference between men and women. However, female students' (65.4%) sex damage experience rate was intentionally ($P < 0.05$) higher than the junior high school student boy (34.6%). The junior high school student who has the experience on which consulted with the Yogo teacher was 3.0% after entrance into a school. The contents on which the junior high school student consulted with the Yogo teacher were the following contents. Human relations with a friend, a senior, etc. are 3.0%, consultation of the body are 2.4%, and activity of an after school are 2.1%.

Key words : sex damage, junior high school student, trouble

1. はじめに

近年, インターネットや携帯電話・マスメディアなどの発達により, 性に関する情報が氾濫する中で, 子ども達の性に関する価値観も多様化, 複雑化している。そして, それに伴い, 薬物乱用, 性感染症, 10代の人工妊娠中絶, 性被害の低年齢化など, 性に関する健康問題も深刻化している。

そのような性の問題に対応するために, 学校現場においては, 文部科学省¹⁾の「人間の性を人格の基本的な部分として生理的側面, 心理的側面, 社会的側面などから総合的にとらえ, 科学的知識を与えるとともに, 児童生徒等が生命の大切さを理解し, また, 人間尊重, 男女平等の精神に基づく正しい異性観をもち, 望ましい行動をとれるようにすることによって, 人格の完成, 豊かな人間形成に資すること」を目的とした性教育が行われてきた。また, 2005年の日本性教育協会²⁾の調査では, 「学校での性教育については, ここ数年間のうちに性交や避妊方法をはじめとして従来より踏み込んで教えられるようになってきている」と述べられている。具体的には, この調査が実施される数年間に学習指導要領が改訂され, 小・中学校では2002年4月

より改訂された学習指導要領が施行されている。それによって, 小学校で第二性徴を取り扱う学年が5年生から4年生に下がり, 中学校でエイズと性感染症を取り扱うことなどが明記された。このことから, 近年性教育が進展してきていると考えられる。

しかし, 村木³⁾が行なった, 小中学校の義務教育諸学校で使用されている教科書の体育保健科や生物学に記載の「性及び性差」に関して, 用語の分析と学校現場の担当教諭からの聞き取り調査によると, 小学校では, 「保健分野の5・6年生用は3・4年生用と比較して性に関する記述は極めて少ない。3・4年生用で生物学と心理学的内容が取り上げられているが, 児童の発達の実態に対応しておらず改善の余地がある。」と指摘し, 中学校では, 「保健体育の分野で, 主として1年生の扱いで生理学的記述が多く, 2年は「環境」であり, 性の学習内容は扱われておらず, 3年では「性感染症とエイズ」で, 性差を図表として扱う程度であり, 性の心理学的内容も少ない」と述べている。このことから, 性教育に関連する学習指導要領, 性教育カリキュラムのさらなる改善が必要と考えられる。

また, 小学校・中学校・高等学校を対象とした本多ら⁴⁾の研究から, 避妊方法の性教育の実施については,

* 宮原慈光保育園

** 大宰府市立学院中学校

学校教育のみが最も多く、男性・女性ともに80%を超えているのに対し、家庭では10%前後と、非常に低いことが明らかになっている。しかしながら、子ども達が抱える性に関する悩みや不安に対処するには、家庭での教育も不可欠である。そのため、子どもの発達段階に応じた指導内容を精選し、学校と家庭、地域が連携して性教育を充実させていく必要があると考えられる。

そのような中で、養護教諭は、その専門性を生かし、子ども達の心身両面にわたる相談や学級担任・教科担任と連携しての性教育の実施が期待されている。現状として、1校につき養護教諭は一人であることが多く、授業を行うにあたっては、保健室を空けることになるため他の教員の支援なしでは性教育を行うことは難しい。しかしながら、日常の健康観察や健康相談活動として、早期に生徒の性の問題を把握し対処することは重要な役割と考えられる。特に性への関心が高まり、性被害の影響が大きい思春期においては早期の対応力が養護教諭に期待される。

よって必要となる性に関する実態調査であるが、これまで、小西⁵⁾ 小西⁶⁾ の研究において、大学生の性被害調査は行われているが、高校生に焦点を当てたものは少ない⁷⁾。また、これまでの中学生を対象とした性に関する悩みや不安の調査によると、秋田ら⁸⁾ の研究で、中学生期の性に関する悩みや不安で最も多かったのは「身長」で、次いで「体重」「にきび」の順であり、「正しいボディイメージが持てるよう学校や家庭での配慮や身長・体重の評価を行わないことが重要であり、特に養護教諭は健康診断を行う立場であるため、専門的知識からアドバイスしていくことが期待される」と述べられている。さらに、相談状況では、「友だち」が最も多く、「学校の先生」「養護教諭」に相談する者は1割で、相談相手として教員の存在感は低い傾向が明らかとなっている。

また、性に関する意識調査はあるものの、中学生の性被害に関する調査は少ない²⁾。やはり、中学生という心身ともに発達が著しい思春期に、性を取り上げた調査は子ども達を刺激してしまい、性行動に何らかの影響が出てしまう恐れがあるからだろう。しかし、性に関する問題は「低年齢化」傾向にあり、中学生期でも性被害にあったり、性に関する悩みや不安を抱えていると考えられる。日本性教育協会²⁾によると、中学生の性被害については、2005年の調査で男子よりも女子の方が被害経験率が非常に高く、特に「露出行為」で約5倍、「性的強要」で2倍、女子の方が高くなっている。

以上のような性被害の現状を受けて、今回、中学生期の性被害の特徴、性に関する悩みや不安の実態等を

明らかにし、養護教諭としての適切な支援に繋げるため、調査を行い分析した。

2. 研究方法

1. 調査方法および調査内容

- 1) 調査期間：平成20年10月中旬～11月下旬
- 2) 調査対象：調査についての協力が得られたK市の中学校に在籍する第2学年の生徒333名（男子156名、女子175名、無記入2名）とK大学生教育学部117名、工学部26名、理学部10名、計153名（男性63名、女性90名）である。
- 3) 調査方法：大学教員及び、中学校の学校長および養護教諭に対し調査内容の説明を行い本研究への協力を求め同意を得た。

大学生については、選択肢法・自由記述法を使用した無記名の質問紙調査票を配布し、後日回収する留め置き法をとった。中学生については、選択肢法・自由記述法を使用した無記名の質問紙調査票を担当が一斉に配布・回収した。

4) 調査内容

(1) 大学生調査

小西⁵⁾ の質問紙の選択肢を一部修正して用いた。調査項目は、所属学部、年齢、性別、小学校入学前から今までの性被害の8種類の経験について5項目（①性被害を受けた相手、②性被害を受けた時期、③性被害を受けた場所、④性被害を受けた時の気持ち、⑤性被害を受けた時の相談相手）それぞれについて選択肢から一つ選択、性に関する悩みや不安で養護教諭に相談できる項目（①身長・体重、②男女交際、③二次性徴、④性的接触、⑤妊娠、⑥性的な嫌がらせを受けた時、⑦その他、⑧養護教諭には相談できない）を複数選択、性に関する悩みや不安があった場合どのような養護教諭であれば相談しやすいかについての自由記述である。さらに、質問紙に対する感想・意見を自由記述で求めた。

(2) 中学生調査

秋田ら⁸⁾ の行なった質問紙を参考に中学生用質問紙を作成した。項目は、クラス、性別、養護教諭に相談した経験の有無とその内容（①身体、②勉強・成績、③進路、④部活動、⑤友人、先輩、後輩、との関係、⑥男女交際、⑦心のイライラに関すること、⑧その他）を複数選択、性に関する悩みや不安を相談する相手（①友達、②先輩・後輩、③家族、④担任の先生、⑤保健室の先生、⑥その他、⑦誰にも相談しない）を複数選択、性に関する悩みや不安で養護教諭に相談できる項目（①身長・体重、②男女交際、③二次性徴、④性的接触、⑤妊娠、⑥性的な嫌がらせを受けた時、

⑦その他、⑧養護教諭には相談できない)を複数選択、性に関する悩みや不安の解決方法(①教科書・授業、②インターネットで調べる、③出会い系サイトの利用、④テレビ・ビデオ・ラジオ、⑤雑誌・本・マンガ、⑥病院・カウンセラーなどの専門機関、⑦その他、⑧誰にも相談できない性に関する悩みや不安はない)を複数選択で求めた。さらに、質問紙に対する感想・意見を自由記述で求めた。

5) 倫理的配慮

中学生に対しては、担任から本研究の目的及び調査内容について説明を行い質問紙調査票の冒頭に、研究のための資料であること、個人の成績や評価に影響するような不利益は発生しないことを記載した。大学生に対しては、調査の前に本研究の目的及び調査内容を説明し、質問紙に研究のための資料であり、個人は特定されず、一部または全部を無回答で提出しても不利益は生じないことを記載した。また、大学生調査票は、封筒に入れて渡し、後日回収する形式をとり、回収についても、封筒に入れた状態で回収した。

2. 分析方法

各質問項目については、全体及び男女の単純集計を行い、大学生調査の性被害とその相手・時期・場所・気持ち・相談対象については各項目間の関連についてクロス集計を行い、カイ二乗検定を用いて1%及び5%の危険率で有意差の判定を行った。統計処理にはExcel統計2006を用いた。「性に関する悩みや不安があった場合どのような養護教諭であれば相談しやすいか」への自由記述は、キーワードを抜粋し、カテゴリ分けをして分類・集計した。

3. 用語の操作的定義

(1) 性被害:「言葉による嫌がらせ、性器をわざと見せられた、無理やり体等を触られた、無理やり抱きつかれた、無理やりキスされた、無理やり性器を触られた、したくないのに性交されそうになった、したくないのに性交された、の8種類の経験」を性被害とする。

3. 結果および考察

1. 性被害の実態に関する大学生調査

1) 質問紙の回収について

表1 大学生の質問紙調査票の回収結果

配布部数	回収部数	回収率	有効回答部数	有効回答率
210	155	73.8%	153	98.7%

表2 学部構成

学部	人数	割合(%)
教育学部	117	76.5%
理学部	10	6.5%
工学部	26	17.0%
合計	153	100.0%

表3 年齢構成

年齢(歳)	人数	割合(%)
18	1	0.7%
19	18	11.8%
20	66	43.1%
21	65	42.5%
22	2	1.3%
23	1	0.7%
合計	153	100.0%

表4 性別構成

性別	人数	割合(%)
男性	63	41.2%
女性	90	58.8%
合計	153	100.0%

表5 学部と性別の構成

学部	男性		女性	
	人数	割合(%)	人数	割合(%)
教育学部	37	58.7%	80	88.9%
理学部	7	11.1%	3	3.3%
工学部	19	30.2%	7	7.8%
合計	63	100.0%	90	100.0%

表1に示す通り、質問紙調査票は210部配布し、回収率73.8%であり、有効回答部数153部、有効回答率は98.7%であった。また、対象者の属性は、表2~表5に示す通り、教育学部が76.5%、20歳と21歳で約85%、やや女子が多く58.8%であった。

表6 性被害経験の有無

性被害経験	全体(n=153)		男性(n=63)		女性(n=90)		男女の有意差	全体の有意差
	人数	割合(%)	人数	割合(%)	人数	割合(%)		
経験あり(n=53)	53	34.6%	25	47.2%	28	52.8%	n.s.	n.s.
経験なし(n=98)	98	64.1%	37	37.8%	61	62.2%	n.s.	
未記入(n=2)	2	1.3%	1	50.0%	1	50.0%	n.s.	
合計	153	100.0%						

χ²検定 n.s.:有意差なし

表7 性被害を受けた時期

時期	全体		男性		女性		男女の有意差	全体の有意差
	人数	割合(%)	人数	割合(%)	人数	割合(%)		
小学校入学前	1	1.0%	1	100.0%	0	0.0%	n.s.	n.s.
小学校	20	19.0%	5	25.0%	15	75.0%	**	
中学校	26	24.8%	9	34.6%	17	65.4%	*	
卒業以降	58	55.2%	16	27.6%	42	72.4%	**	
合計	105	100.0%						

χ²検定 **P<0.01 *P<0.05 n.s.:有意差なし

表6の通り、大学生の性被害経験の割合は、34.6%で男女間での有意差はなく、性別の違いはほとんどなかった。また、表7の通り、中学生期は、全体の24.8%で、女子が有意(P<0.05)に多く、男子(34.6%)より女子(65.4%)の方が、性被害に遭っていた。

表 8 性被害の項目ごとの回答人数と割合(複数回答)

性被害の項目	全体(n=53)		男性(n=26)		女性(n=28)		男女の有意差	全体の有意差
	人数	割合(%)	人数	割合(%)	人数	割合(%)		
言葉による性的な嫌がらせの経験	18	34.0%	4	16.0%	14	50.0%	**	n.s.
性器をわざと見せられた経験	19	35.8%	4	16.0%	15	53.6%	**	
無理やりお尻・胸・背中など体を触られた経験	19	35.8%	8	32.0%	11	39.3%	n.s.	
無理やり抱きつかれた経験	19	35.8%	13	52.0%	6	21.4%	*	
無理やりキスをされた経験	4	7.5%	2	8.0%	2	7.1%	n.s.	
無理やり性器を触られた経験	9	17.0%	5	20.0%	4	14.3%	n.s.	
したくないのに性交された経験	4	7.5%	1	4.0%	3	10.7%	n.s.	
したくないのに性交された経験	4	7.5%	1	4.0%	3	10.7%	n.s.	

χ²検定 **P<0.01 *P<0.05 n.s.有意差なし

表 9 中学生期における性被害と受けた相手(加害者)の関連(複数回答)(人)

性被害の内容	回答人数	友だち	先輩・後輩	恋人	家族	学校の先生	その他	具体的記述
言葉による性的な嫌がらせの経験	3	2	0	0	0	0	1	学校の同級生
性器をわざと見せられた経験	6	0	0	0	0	0	6	知らない人、見知らぬ人、知らないおじさん、変質者
無理やりお尻・胸・背中など体を触られた経験	3	1	0	0	0	0	1	他人、じゆくの先生
無理やり抱きつかれた経験	2	0	0	1	0	0	1	変質者
無理やりキスをされた経験	3	1	2	0	0	0	0	
無理やり性器を触られた経験	6	5	1	0	0	0	1	知らないおじさん
したくないのに性交された経験	2	1	0	1	0	0	0	
したくないのに性交された経験	1	0	0	1	0	0	0	

表 8 の通り、性被害の項目では「性器をわざと見せられた経験」「無理やりお尻を・胸・背中など体を触られた経験」「無理やり抱きつかれた経験」が多く、これらは経験者の 35.8% を占めていた。中学生期は、表 9 の通り「性器をわざと見せられた経験」「無理やり性器を触られた経験」が多く、その相手(加害者)は、それぞれ「知らない人・変質者」,「友だち」が多かった。また、被害にあった場所は学校や通学路が多く、学校内での指導及び校区内の安全対策を行うことが重要だと考えられた。

表 10 性被害を受けたときの相談対象(複数回答)

相談対象	全体(n=53)		中学生期(n=26)	
	人数	割合(%)	人数	割合(%)
友だち	25	47.2%	6	23.1%
先輩・後輩	4	7.5%	0	0.0%
恋人	2	3.8%	0	0.0%
家族	13	24.5%	5	19.2%
担任の先生	3	5.7%	2	7.7%
養護教諭	1	1.9%	0	0.0%
相談しなかった	53	100.0%	15	57.7%
その他	3	5.7%	1	3.8%

表 11 大学生にとって養護教諭に相談できる項目(n = 153)

項目	人数	割合(%)
身長・体重	100	65.4%
男女交際	50	32.7%
二次性徴	56	36.6%
性的接触	17	11.1%
妊娠	35	22.9%
性的嫌がらせ	24	15.7%
相談できない	27	17.6%

また、性被害を受けた時の相談対象については、表 10 の通り「相談しなかった」経験者が 100.0% と最も多かったが、実際には友だち・家族への相談が多く、担任や養護教諭は合わせて 7.6% に留まった。そして中学生期も同様に、被害を受けても誰にも相談しない傾向があり、特に、養護教諭など「教師」に相談しにくいと考えられた。表 11 の通り、大学生にとって養護教諭に相談できる項目は「身長・体重」「二次性徴」など身体に関することであり、次いで「男女交際」も上位に挙げられた。さらに、どのような養護教諭に相談できるか問うた自由記述には、「秘密厳守」などの「養護教諭の対応」に関しての記述が多く(55.8%)見られた。

2. 中学生の性に関する相談についての中学生調査
1) 質問紙の回収について

表 12 中学生の質問紙調査票の回収結果

配布部数	回収部数	回収率	有効回答部数	有効回答率
360	333	92.5%	331	99.4%

表 13 中学生の性別割合

性別	人数	割合(%)
男子	154	46.5%
女子	177	53.5%
合計	331	100.0%

表 14 中学生が養護教諭に相談した経験の有無の割合

相談経験	全体(n=331)		男子(n=154)		女子(n=177)		男女の有意差	男女全体の有意差
	人数	割合(%)	人数	割合(%)	人数	割合(%)		
経験あり	22	6.6%	7	4.5%	15	8.5%	*	n.s.
経験なし	309	93.4%	147	95.5%	162	91.5%	n.s.	

χ²検定 *P<0.05 n.s.有意差なし

表 14 の通り、中学入学後、養護教諭に相談した経験があるのは 6.6% であり、男女間では女子が有意(P<0.05)に多く、男子(4.5%)より女子(8.5%)の方が相談経験率が高かった。

表 15 の通り、性に関する悩みの相談対象としては、「友だち」が 51.7% と最も多く、次に「家族」36.3% と、中学生にとって「友だち」や「家族」の果たす役割は

表 15 中学生の相談相手別に見た全体・男女の比較 (複数回答)

相談相手	全体(n=331)		男子(n=154)		女子(n=177)		男女の有意差	男女全体の有意差
	回答数	割合 (%)	回答数	割合 (%)	回答数	割合 (%)		
友だち	171	51.7%	63	40.9%	108	61.0%	**	**
先輩・後輩	16	4.8%	7	4.5%	9	5.1%	n.s.	
家族	120	36.3%	37	24.0%	83	46.9%	**	
担任の先生	8	2.4%	3	1.9%	5	2.8%	n.s.	
養護教諭	10	3.0%	4	2.6%	6	3.4%	n.s.	
その他	5	1.5%	3	1.9%	2	1.1%	n.s.	
誰にも相談しない	104	31.4%	63	40.9%	41	23.2%	**	

X²検定 **P<0.01 n.s.有意差なし

表 16 中学生が養護教諭に相談した内容別に見た全体・男女の比較 (複数回答)

相談内容	全体(n=331)		男子(n=154)		女子(n=177)		男女の有意差	男女全体の有意差
	回答数	割合 (%)	回答数	割合 (%)	回答数	割合 (%)		
身体	8	2.4%	2	1.3%	6	3.4%	n.s.	n.s.
勉強・成績	6	1.8%	1	0.6%	5	2.8%	n.s.	
進路	2	0.6%	0	0.0%	2	1.1%	n.s.	
部活動	7	2.1%	2	1.3%	5	2.8%	n.s.	
友人・先輩・後輩・先生との関係	10	3.0%	2	1.3%	8	4.5%	*	
男女交際	2	0.6%	1	0.6%	1	0.6%	n.s.	
心の不安やイライラ	4	1.2%	0	0.0%	4	2.3%	*	
その他	2	0.6%	2	1.3%	0	0.0%	n.s.	

X²検定 *P<0.05 n.s.有意差なし

大きいと考えられた。また、表 16 の通り、養護教諭に相談した内容は、「友人・先輩・後輩・先生との関係」3.0%、次いで「身体」2.4%、「部活動」2.1%であったが、相談経験なしが93.4%だったこともあり、どの内容も低い相談率であった。また、表 11 の大学生が養護教諭に相談できると思う項目結果と比較すると中学生が実際に養護教諭に相談している経験は低く、年齢によって相談できると考える内容は変わってくると考えられた。

表 17 中学生の性に関する不安や悩みの解決方法別に見た全体・男女の比較 (複数回答)

相談内容	全体(n=331)		男子(n=154)		女子(n=177)		男女の有意差	男女全体の有意差
	回答数	割合 (%)	回答数	割合 (%)	回答数	割合 (%)		
教科書	14	4.2%	9	5.8%	5	2.8%	n.s.	*
インターネット	27	8.2%	11	7.1%	16	9.0%	n.s.	
出会い系サイトの利用	1	0.3%	1	0.6%	0	0.0%	n.s.	
テレビ・ビデオ・ラジオ	16	4.8%	5	3.2%	11	6.2%	*	
雑誌・本・マンガ	30	9.1%	5	3.2%	25	14.1%	**	
専門機関	6	1.8%	2	1.3%	4	2.3%	n.s.	
その他	9	2.7%	5	3.2%	4	2.3%	n.s.	
誰にも相談できない性の悩みはない	231	69.8%	110	71.4%	121	68.4%	n.s.	

X²検定 **P<0.01 *P<0.05 n.s.有意差なし

表 17 の通り、性に関する悩みや不安の解決手段については、「誰にも相談できない性に関する悩みや不安はない」が69.8%、次いで「雑誌・本・マンガ」が9.1%、「インターネット」が8.2%であった。このことから、マスメディアからの情報が問題解決に用いられやすいため、学校教育や家庭教育で子どもに情報判断能力を身につけさせることが必要と考えられた。さらに、解決手段として「専門機関」や「教科書・授業」と回答した者もあり、専門機関との連携や教員同士の共通理解と協力で生徒に役立つ性教育を行う必要があると考えられた。

3. 中学生期の性被害と中学生への支援について

今回の大学生を対象とした質問紙調査では、性被害経験者の割合は、36.6%だった。また被害経験率は男女において有意差はなく、経験者における性別の違いはほとんどないと考えられた。全体的に性被害経験は少ないという結果であったが、全国的にみても少年の性被害は青少年白書⁹⁾ からわかるように平成 18 年度の調査に比べ、平成 19 年度は 8.6%減少していた。このことから、レイプ事件などの司法判断などが厳しくなってきたことが被害の減少に繋がっていると推測される。しかし、年間に 5000 件を超える少年への性犯罪が発生しているため、未だに少年への性犯罪は深刻な状況と考えられる。

また、どのような養護教諭に相談できるかについての自由記述では、「秘密厳守」などの「養護教諭の対応」に関しての記述が多く (55.8%)、養護教諭の対応能力が求められていると考えられる。特に、思春期の子どもにとって相談できるのは信頼関係がある人であるため、子ども達との日頃からのコミュニケーションが大切であると言える。さらに、今回の調査で、男性から、「同性の教諭」の意見もあり、男性の養護教諭の必要性も考えられる。

大学生の性被害調査から分かる、中学生期の性被害経験者の割合は、24.8%だった。経験者の男女間では女子が有意 (P < 0.05) に多く、中学生期は男子より女子の方が性被害にあっていると見える。また、その特徴は、被害の種類としては「性器をわざと見せられた経験」「無理やり性器を触られた経験」が多く、被害を受けた相手 (加害者) が「知らない人・変質者」と「友だち」が多かった。加害者と相談対象は関係なく、加害者が誰であっても誰にも相談しない傾向があり、また、被害が深刻になればなるほど相談しない傾向が窺え、特に、養護教諭など「教師」には相談しにくいと考えられた。また、被害にあった場所は学校や通学路が多く、学校内での指導および校区内の安全対策を行なうことが重要だと考えられる。さらに、傷つ

いた経験をして「誰にも相談しない」傾向もあるため、養護教諭だけでなく教師や大人は日頃から子どもとのコミュニケーションを大切に、子どもが話しやすい雰囲気を作っていくことが必要と考えられる。

中学生において、今までに養護教諭に相談した経験は「あり」が6.6%、「なし」が93.4%と相談経験がない生徒が多く、相談対象として養護教諭は認識されていない、もしくは、相談するほどの悩みがなかったと考えられる。また、「あり」と回答した人は男子4.5%、女子8.5%で女子が有意 ($P<0.05$) に多く、男子よりも女子の方が相談経験があることが明らかになった。

中学生が養護教諭に相談した内容は、「友人・先輩・後輩・先生との関係」3.0%、次いで「身体」2.4%、「部活動」2.1%であった。そして性別では、「友人、先輩、後輩、先生との関係」と「心の不安やイライラ」が、男子より女子が有意 ($P<0.05$) に多く、これらの項目に関して女子の方が男子よりも養護教諭への相談が多いと考えられる。

中学生において、性に関する不安や悩みがあった場合の相談対象として、全体で最も多かったのは「友だち」が51.7%と最も多く、次に「家族」36.3%と、中学生にとって「友だち」や「家族」の果たす役割は大きいと考えられる。

中学生が養護教諭に相談した内容は、「友人・先輩・後輩・先生との関係」3.0%、次いで「身体」2.4%、「部活動」2.1%であり、全体的に性に関する悩みや不安は養護教諭には相談しない傾向があり、大学生と異なっていた。よって、年齢によって相談できると考える内容は変わってくると考えられる。

中学生において、性に関する不安や悩みの解決手段について、全体で最も多かったのは「誰にも相談できない性に関する悩みや不安はない」が69.8%、次いで「雑誌・本・マンガ」が9.1%、「インターネット」が8.2%であり、全体における項目間に有意な差 ($P<0.05$) が見られた。また、男女を比較すると、「テレビ・ビデオ・ラジオ」が女子に有意 ($P<0.05$) に多く、「雑誌・本・マンガ」も女子に有意 ($P<0.01$) に多かった。マスメディアからの情報が問題解決に用いられやすく、学校教育や家庭教育で子どもが正しい情報を判断できる能力を身につけさせる指導が必要と言える。さらに、「専門機関」も問題解決手段として連携を図っていくことにより、子ども達の性に関する不安や悩みに適切な対応ができると考えられる。

また、現代においては、性教育の行い方も重要であると考えられ、特に、生徒に役立つ性教育を行なっていくためには、田代¹⁰⁾ が述べているように、教員の共通理解と協力が必要と考えられる。よって、養護教諭がティームティーチング (TT) として学級での保

健の授業に入ったり、担任などと連携して、性教育を行なうことが重要と考えられる。

4. 結論

今回、大学生を対象に性被害について、中学2年生を対象に性に関する不安や悩みについて質問紙調査を行い、分析した結果、以下の結果を得た。

1. 性被害経験者の割合は、34.6%であり、男女差はほとんどなかった。しかし、中学生期は、男子(34.6%)より女子(65.4%)の方が有意 ($P<0.05$) に性被害経験率が高かった。
2. 性被害は「性器をわざと見せられた経験」「無理やりお尻・胸・背中など体を触られた経験」「無理やり抱きつかれた経験」が多く、性被害経験者の中で、これらの性被害経験率はいずれも35.8%だった。
3. 性被害を受けた時に、相談しなかった経験は100.0%だったが、相談対象としては、友だち(47.2%)、家族(24.5%)が多く、担任や養護教諭など教諭に相談した人は7.6%であった。
4. 中学入学後、養護教諭に相談した経験がある中学生は6.6%だった。性に関する悩みの相談対象としては友だちが51.7%と最も多く、次に家族36.3%だった。次いで誰にも相談しないという意見が31.4%あり、担任や養護教諭など教諭に相談した生徒は5.4%だった。
5. 中学生が養護教諭に相談した内容は、「友人・先輩・後輩・先生との関係」3.0%、次いで「身体」2.4%、「部活動」2.1%であった。
6. 性に関する悩みや不安があった場合の中学生の解決手段は、「誰にも相談できない性に関する悩みや不安はない」が69.8%を占め最も多かった。

5. おわりに

本研究は、中学生期の性被害の実態と中学生の性に関する悩みや不安について分析し、中学生に対し、養護教諭が行なう支援を明らかにすることを目的として行った。

本研究の限界としては、一中学校の2年生のみに調査したという対象の狭さと大学生調査票の回収数の少なさが挙げられる。よって、今後の課題としては、中学生の他学年や複数校にも調査を行うことで中学生の実態を把握し、大学生調査についても、プライバシーにさらに配慮した調査方法および回収方法を工夫する必要があると考えられる。

引用文献

- 1) 文部科学省：学校における性教育の考え方，進め方，1，1999
- 2) 財団法人 日本性教育協会：若者の性，第6回青少年の性行動全国調査報告，123 - 130，147 - 171，2007
- 3) 村木久美江：小中学校の性教育に関する，実態調査に基づく比較研究（第一報），第55回日本学校保健学会，472，2008
- 4) 本多正尚，小澤真希，鈴木涼子，他：小・中・高校生に対する性教育の実態とその評価，琉球大学教育学部紀要，159 - 163，71，1999
- 5) 小西聖子：少年の性暴力被害の実態とその影響に関する研究報告書，性暴力被害少年対策研究会，1999
- 6) 小西吉呂：性被害をめぐる諸問題—質問紙調査に寄せられた自由記述をもとに一，沖縄大学法経学部紀要，創刊号，35 - 51，2001
- 7) 野坂祐子：高校生の性暴力被害実態調査，委託調査報告書，2004
- 8) 秋田和子，芝木美沙子，笹嶋由美：中学生の性意識の実態調査，北海道大学教育大学紀要（教育科学），31 - 46，56(2)，1998
- 9) 内閣府：平成19年度青少年白書，2007
- 10) 田代浩之：九州地区健康教育研究大会，112 - 114，2008